

JAPAN GET-ACQUAINTED PROGRAM

NEWSLETTER NO.2

November, 1961

Editor
Hachiro Kubota

その後は御元気で、おすこのことと存じます。私は先回のニューズ・レター発後、アダムスキのオミ著の著書「Flying Saucers Cataclysm」の翻訳にとりかかりましてこの仕事に没頭しておりまして、実のところ種々の事情のためにUFO研究にはなかなか意欲を失いかけたような次第で、翻訳の仕事も途々としてはかどらないままに、雑務に追われて明け暮れしておりましてと云う、最近、京都でアダムスキの親友である米田の実業家、ハンズン氏夫妻に会って詳細な情報と温かい激励とをたまわり、また参良で某氏から心あたたまるもてなしと激励のお言葉をいただきました。またもや生気をとりもとしてこのニューズ・レターの作製にとりかかった次第であります。人同の善意ほど有難いものはないと思いますが、少数の方々から寄せられる激励のお言葉にと私にとって何物にも代え難い貴重なおエネルギー源であると云えます。弱音を吐く私に「久保田よ、元氣を出せ!!」とアダムスキは叱咤の声を送ってよこしました。身近かな皆探からもときには「どうした、し、かりせよ」と一言ハガキで書き送って下されば、私の喜びこれにすぎるものはありません。

さて、アダムスキのオミ著はその書名からして田舎との訣別を遂げたもののように思われるかもしれませんが、内容は必ずしもそうではなく、これは「同業記」の続編ともいふべきもので、「同業記」が判然としなかつた部分をかなり詳述しています。疑問の点はこの書によっておわかりを解するでしょう。原書の出版社は「同業記」の場合と同様、ニューヨークのアップレード・シューマン社です。全部で二百九十度のうち、ちよ

うど半分目にあたるオ二部オ九章までが翻訳済でありますので、その分の旗勝を二二でお伝え致します。原書全部の旗勝(というよりも全訳を)お伝えしたいのは山々ですが、ガリ版を切る仕事はとも疲れますし、オ一、翻訳してこそ精読したということになりますので、後半はいずれまた完字後にお伝え致しますから御諒承下さい。目次は次の通りです。

はしがき — 著者

序 文 — C・A・ハニー

オ一部

オ二章 なぜ宇宙人は来たか

オ三章 二の太陽系内の宇宙活動

オ四章 宇宙船と重力

オ五章 最近の科学の発達

オ六章 二の太陽系内の変化

オ七章 砂漠の足跡

オ八章 懐疑論者にたいする回答

オ九章 テマにたいする回答

オ十章 私は宇宙人から何を学んだか

オ十一章 聖書とUFO

オ十二章 抽象論、心靈学、宗教

オ十三章 世界講演旅行

オ十四章 アメリカからニュージールランドへ

オ十五章 遼州

オ十六章 ダーウィンからイングリランドへ

オ十七章

オ四章 オランダ女王との会見

オ五章 フェーリッヒ事件

オ六章 旅行の結末

オ七章

オ一章 悪魔すなわち時の人

オ二章 結語

以上

オ一部

『オ一章 なぜ宇宙人は来たか』

(註。この章の最大のポイント、戦後急速に円盤目撃現象が発生してきた理由が先づ冒頭に述べてあることである)

◎ 一九四六年十月に米國が月に向けて電波を放射したところ、それが空面には返返って出陸の遊星の気付くと二つとなり、遊星人はこれが地球の遠距離信号であるにちがいないと解して、調査のために急遽多数の円盤を地球へ派遣した。これが右の理由である。当然彼らは放射地点に集中したため、米國が最も多くの目撃現象をもつ國となった。

◎ 進化した遊星人といえども誤ちをおかすことはある。円盤のなかには地球の磁場やその他のコンディションに不馴れなものもあり、そのために墜落事故を生じるものもあった。この事故についてはフランク・スカリーがその著書の空飛ぶ円盤の真相の中に詳細に述べている。スカリーはこの著書は多数の円盤書のなかで真実を述べた少数の書の一つであり、貴重なものであるが、嘲笑と罵詈雑言のもとに葬り去られた。各國では多数のコンタクトや目撃例が統出している。(註。珍しい実例が少しばかりこの章で紹介してあります) その後円盤は地球が三つむりのつある自然の周期的な変化を観察しつつある。

◎ 地球の数学上の概念は誤まっている。宇宙人は「1+1=10」という自然の法則を応用している。すなわち「3」は生み出された子供(結果)であり、これには両親の要素「2」が含まれている。地球でも古代には

この法則が知られていたが、いつのまにか「0」の概念が導入されて誤まった数学が発展した。宇宙人の数学は「1」から「9」まで進み、「10」はなくてさらに「9」の倍数の「18」へ進み、さらに「9」の倍数の「27」……と進んでゆく。戦後地球へ最初に墜落した円盤を科学者が調査したところ、内部の構造はすべてこの「9進法」にもとずいて建造されたことが判明したとスカリーの書物に述べてあるが、これは真実の記録である。

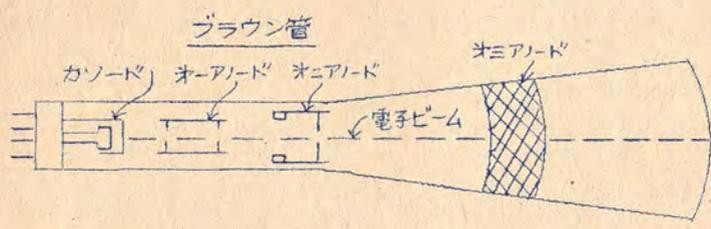
◎ その後宇宙人は、太陽系内に発生する自然の変化と核爆発の危険性を警告する方向にも努力を転じた。根本的には彼らの存在を地球人に目覚めさせ、地球人と親しく交わることを目的としている。

『オ二の太陽系内の宇宙活動』

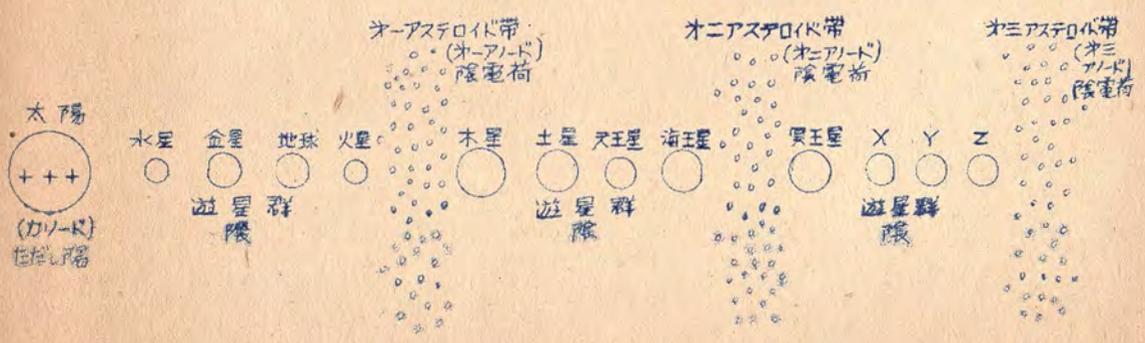
『オ三章 二の太陽系内の宇宙活動』

(註。この章ではきわめて興味深い理論が述べられています。すなわち地球よりも太陽から遠い遊星でなせ地球と同様の光と熱が得られるかという理由です。太陽の放射線はその距離の自乗に反比例して弱まってゆくといふ厳然たる法則を如何ともしがたく、この実は私もおぼえてから疑問に思っていて、結局、遠方の遊星が地球と同様の光と熱を得るのは、遊星を包む大気層が一種のコンデンサー・レンズの役目を果たすのだからと私なりに考えていました。これは当っていいか、たようです) ◎ 右の理由は次の通りである。すなわち太陽系をテレビのブラウン管にたとえたとよい。カソードから出る電子をグリッドとアノードの高電圧が引き寄せる。すると電子は高速度でアノードに引っぱられ、加速さ

れた上で次のアノードへ直進する。かくて種々の異なるアノードと陽の高電圧を用いることにより、理論的には非常な遠方にまで電子ビームを元のままのスピードで放射することが可能ということになる。太陽系ではオーステロイド帯とオニオステロイド帯とが十三個の遊星を四個づつ三群にわけていて、この陰電荷を帯びたオステロイド帯がケリッドの役目をする。陽電荷を帯びた太陽の放射線は火星と木星間のオニオステロイド帯に吸引されて加速され、次の海王星と冥王星間のオニオステロイド帯へ送られ、ここでもた加速されて結局元のままのスピードで最後の遊星にまで進行する。かくて、それ自体が陰である各遊星はこの陽の微粒子を空間から引き寄せ、これが電離層と太陽圏の上層とで液化されて、大気圏内の無数の微粒子がその濃縮された放射線で刺激を受けて可視光線を放つ。地面はこの線を吸収し、かわりに赤外エネルギーを放ち、このエネルギーが大気を活性化させて、それによって熱が放射されるのである。最後の遊星の外側にはオニオステロイド帯があつて、これは他の太陽系とのバランスを保つ役目をしている。これらのオステロイド帯は、また新しい遊星を生み出す子宮のようなものである。吸引と反掩の法則のためにオステロイド帯中の微粒子同志のあいだに凝集の氷態が起つて物質を形成する。つまり、一遊星が崩壊の過程に入ると、その遊星の磁軌的な作用によってオステロイド帯から物質が引き寄せられ、太陽系内の完全なバランスを保つ、そしてその古い遊星が崩壊するにつれて新しい遊星が自動的に作られるのである。(註。遊星の形成される過程についてはもっと詳細に述べてあります。ここにはほんの簡易な概略のために、おわかりにくいことと存じます) 右を因すれば次の通りである。



太陽系



『才三章 宇宙船と重力』

(註) 二二では地球の磁場の状態から読みおこし、宇宙船の推進の原理のヒントを与えています。が、一字一句が重要な意味をもっていますので、概略ではとても意をつくすことはできませんが、ザッと記すと次の通りです)

◎ 池の中へ二個の小石を同時に落とすと二通りの丸い波紋が作られて、両方の波の先端が出会うところ、干渉模様が作られる。この干渉点をたどると楕円形となり、小石の落ちた各地点から楕円の長軸の両端に位置することになる。天体間の磁場にもこれと同じ関係が存在し、遊星間または遊星と太陽間にも磁場の干渉によって楕円磁場ができ、これが各天体間を結びつける強力なクサリの役目をするのである。

◎ 遊星間の磁気の川は、その流れが常に往復運動を起しているのので、宇宙船はその運動の位置を利用して一方方向へ進行する。往復運動の両道と同時に利用すれば船体は空間に停止する。宇宙船はロケットのような重力に抗う機械ではなくて、重力に従う原理にもとづいて作動する。すなわち船体内の発生器によって重力場を発生して、これが遊星の磁場と共振し、この共振重力場が船体を無重力にする。そして自然の力を利用するので光速以上のスピードで進行できるのである。宇宙船の推進力はファンダグラーフ静電起電機によって与えられる力に比較できる。空間浮揚の実験としては次のような方法がある。加減抵抗器でコントロールされた電磁石の直立した鉄心のまわりへアルミニウム輪を運すと、その輪は空間に停止する。しかしロケットはアルミニウム輪のように磁気の渦動によって浮き上がるのではなく、それ自体の共振の場を生み出すのである。(註) 次いで円盤の光る理由と消滅現象について述べてありますが、これはあくまでも物理的は作用であって、肉眼で

見た場合に二瞬消えたように見えるだけのことで、心算や電算的なるコインタクトマンたちか云うような非物質化現象ではけいりつけ加えありません。

『才四章 最近の科学の発達』

(註) この章では主として米ソ両国のロケット打上競争に言及し、ソ連の月写真などの意義について述べ、科学者が月の裏側に植物が存在する事実を発見したことが強調してあります。さらに科学者達が電と発見した新事実を数多く紹介し、引力のコントロール機構は最後のものは電気的のものになる旨を述べ、この装置を研究している十人の会社、米国にあることを紹介し、いつか引力の秘密が完全に明らかになればその解答があまりに簡単なので、「小学生でもいえるはず」といふことを思いつかなかつたのだらう、と科学者は驚いておられると述べています。

『才五章 太陽系内の変化』

(註) この章の冒頭にきわめて興味深い一節がありますので、ここに訳文をそのまゝ掲げることになります。

「最近私は(註) アダムスキは) 数多くある、円盤星群のいくつかある惑星団から送られた機関説で、地球上に大変動が起る等々の記事を読んだ。すなわち、この大変動が発生したときには、電機機が未として、選ばれた少数の人々を地上から救出して連れ去るといふのである。これは全然根拠のない物語りだ。」

(しかし地球上に自然現象の変化が次第に増加する事象を私は肯定的に述べて、その理由を二、三次のようにあげています。)

◎ その理由のまず第一は、パロマー天文台のハロルド・D・バンコック博士が発見した太陽の磁極の逆転である。大変化が地球の磁場をも何

うかの影響を及ぼし、そのために地上に変化が増加することか考えられる。オニに、ロケットや人工衛星の打上げのために空間の種々の型亦攪乱され、圧力を変えたりして、それが原因で地上にも影響を及ぼす。つまり攪乱の余波が天候に変化を起すのである。最大の攪乱物は核爆発である。このために起る磁場内の変化は太陽の磁場の逆転によって生じる変化と結びついていて、これが長いあいだに種々の変動を生じさせるであろう。

◎ しかし、扱々は如何なる震災をも恐れてはならない。震災の発生によって人間が死ぬるのは、神の罰ではなくて、全く本人がその時期にその場所にいたからにすぎない。これを避けるには、科学者の警告に注意し、災害の発生を事前に感じ取る。直感力をもつようにし、自己の内奥に起る予感に注意を払うべきである。オズミその他の動物はこの予感力を有して、早くから難をよけるのである。

『オオ六章 砂漠の足跡』

(註) この章はあの有名な一九五二年十一月二十日のデザート・センターにおける最初の金星ととの会見の際に残された足跡の紋様や、写真の原板に現われた予感的な象形文字などについて解説したものです。

◎ この紋様については世界中の多くの人が解説を試みたが、その殆どは心的な性質のもので、正確な意味とはかけ離れたものだと言われ、兄弟は語った。ところが、アダムスキに与えられたのと全く同じような象形文字の記された石を宇宙人から受けとったスペインがいる。またマルセル・F・ホメットの「太陽の手」という書物に、アルジェンティンで発見された象形文字の写真が見えていて、これは砂漠に残されたのと同じもので、これによって遊星間の交通と地球の古代文化とをつなぐ一連の事実が裏書きされた。アダムスキに象形文字が与えられた主な理由

の一つは、「地球人が敬し、かっていることを宇宙人が知っていたという具体的な証拠を与えられた」であった。この象形文字を正しく解説した人がある。アフリカに住む一科学者である。そして宇宙人から正しいと確認された。(註) 以下はこの部分の訳文です。「ネガに現われている各文字を、はめ絵の駒として応用することによって彼は円盤の図形を作成することができた。また足跡の紋様のほかにその文字を加えて大母船の要図を作り出したのである。この文字を研究したり、あれこれと配列をやり変えたりしているうちに、宇宙船で用いられる推進力とパワーがコントロールされる方法に関して彼は或るアイデアを思いついた。そこでそれを応用して実験してみたところ、驚くべき成功をおさめたと彼は云っている。しかも地球の古代文明や哲学や他の遊星のそれと一致するものがあった。そのことも例の象形文字のなかに述べてある。

『オオ七章 懐疑論者にたいする回答』

(註) ニニではアダムスキの実見記を以ての各体験記中、特に金星に人類が存在する可能性にたいして猛烈な攻撃が起ったけれども、最近では次に科学者によってその可能性が認められたことを述べ、科学者の各氏名とその声明内容を豊富に掲載しています。また月に大気が存在する点については、ソ連のロケットによって発見された月面の低エネルギーのイオン化ガスの霧と高空の電離層の存在など、明らかにこれらつのであると例証しています。その他、ソ連のカサクスタン天体物理研究所が火星と金星の軌道の外側を別の遊星が存在する事実を発見したこと。米国のスミソニアン研究所のバコズ博士もそれを裏付けていること。ウィリアム・シントン博士がパロマーの二百インチで火星の植物を確認したこと。ケアリフオーニア大学のウェルズ・ウエック教授が火星の運河は知的な生物によって作られたものだと証明したこと。その他多くの新発見例もある。

げて、地球の科学が次に他の遊星にも生物が存在する可能性を認める方向に進んでいることを強調しています。また従来の天文学で有力な武器であった分光学と熱電計が他の遊星の研究には殆ど役に立たないことを人工衛星が実証した事実も付記してあります。すなわち、人工衛星に分光学を積込んで大気圏外から地球を観測させたところ、「この地球には人類の住めるような条件はない。水と酸素が存在しないからだ。」という報告を米ソにも得たという事実は興味深いものがあります。電離層の帯電層が酸堿と水のスペクトル光線を妨げたために記録されなかったという事です。またアダムスキがヴァン・アレン帯の存在を早くから、同業記の中で報告していたことは特筆に値します。

『オ八章 デマにたいする回答』

(註。この章ではアダムスキの体験をソソだと非難するけれどデマをとりあげて、迷っている人々に正確な回答を与えようとしたものです。)

◎一九五八年に発生したキャンザス市事件について流されたテレビドラマのなかで、特に惑星団体の主宰者が流した情報は完全なデッチャゲてあった。(註。この氏名はあげてありませんが、どうやらNORCAPのキーパーを意味するようです)

◎私が(バアダムスキが)パロマー・ガーテンズの飲食をまであるという説は完全に間違っている。あのカフェーはアリス・ウェルズ夫人の所有であり、私はただその世話にわたっただけである。このカフェーはたまたま飲食店としてではなく、ホリデイ誌に三度も紹介された有名な店である。また私がかつて「ハンバードステークの行商人」であつて、空飛ぶ円盤乗隊のリーダーとして踊っていた人物であるという説も全くの誤りである。またかりにこの説が真実であつても、それは私の価値をいさゝかも傷つけるものではない。なぜなら、米国は有名な

き一般文藝に因る将来を預っているからである。

◎一九四四年に私は或る研究誌に寄稿を掲載してそのなかでイエスキリストが宇宙船に乗って地球へ来るという記事を書いたことになっており、一九五三年にその記事を書きなおしてイエスの御名を全大文字ローンにとり変えたとその編集者は仄めかしているが、これは大ウソである。私はその頃そんな記事を書いたことはない。またイエスの御名をそんなふうにとり替へて取扱うことは私にはできない。(註。その他諸報のデマをとりあげてその虚偽性を指摘していきます)

『オ九章 私は宇宙人から何を学んだか』

(註。この章は最も頁数が多くて、いわばこの書の中の巨篇であるとも云えます。またアダムスキは宇宙のことを最もよく聞かされているので、他の進化した遊星という場合はほとんど全量に言及しています。)

◎現在世界中にはかなり多くの宇宙人が地球人の間に混り込んでいるが、地球人はこのことを知らず。宇宙人は各国政府、公衆機関、軍隊などに入って働いているが、彼らは豊富な能力、すなわちテレパシーを駆使して端の人々を驚かせるのが普通である。しかしテレパシーの能力を持つ人々をすべて宇宙人と断定するのはよくない。冷戦にやめる柄によつて判断すべきである。

◎地球人のなかには、この地球がイヤになつたので他の進化した遊星に連れて行ってもらうことを望む人たちがいるが、この態度は間違っている。我々はこの地球で生きねばならぬためにこの地球に生きて来たのであるから、自己の住む世界を聖域とみなして生活しなければならぬ。低級な人が急速に進化した世界へ行くとかかえて苦しむだけである。

◎地球の農業には最大限の収穫をあげようという貪欲のために、人工肥料などを用いて土地を酷使したがるけれど、今やそれは人工肥料を用

いなりて、收穫があつたらその何割かを土地に返してやり、輪作を励行して土地に休息を与えてやる。かくて「取れる食糧は健康を保つのに必要なまめめてすぐれた自然の要素をすべて含んでいる」のである。我々は自然のものと帰つて因果関係を知るべきである。

◎ 地球は宇宙という学校のほかの一つの教室にすぎず、我々はここで学ぶべき多くのことを持つてゐる。この課程を終了しないで一足飛びに他の進化した遊星へ進級することはできない。宇宙人が地球へ来るのは地球人が普遍的な生命の諸法則を知るのを手伝うために来るのである。すぐれた教師は決して生徒をやりこめたりしない。生徒の精神が能く考え方をよく見ながら、知的に未発達な若い人たちの援助しようとする。

宇宙人もこれと同じ態度を奉仕してゐる。そして調和ある生き方を示すことによつて、同じようにやつてみようという頼みを地球人に起こさせることを望みながら地球人のあいだに混つて生活してゐるのである。

◎ 地球人の最も間違つた態度の一つは「好き嫌ひの心である。これを我々は克服しなければならぬ。また他人にたいして権力を誇る態度も全く間違つたことで、金星では万人が平等だとみなされてゐる。

◎ 金星では他人の行爲や想念にたいして一方的に指図することなく、創造者によつて与えられた各人の天賦の自由を認めてゐる。

◎ 宇宙人は地球人と同様、たむけられたり救つたりダンスをしたり、あらゆる種類のスポーツをやつたりする。しかし彼らは常にただやがて多くを語らない。これは、口で語るといふことには多くのエネルギーが費されるからである。地球人はあまりにしゃべりすぎて、時間とエネルギーを浪費してゐる。我々は自己の想念の出所と或る想念のとりこになる理由の方へ自分の心を向けるべきである。そして自分自身の想念の主人公にならねばならぬのである。

◎ 各遊星では遊星ごとに一種の言語が用いられて、それが遊星ごとにそれぞれ異なるので、宇宙の兄弟たちは他の遊星の言語を学ぶとるように努力する。地球では多種類の言語がありすぎる。

◎ 宇宙の隣人たちは生きるための原則といったものを持つてゐる。これは土自となるべきもので、子供の生活をまずこれに基礎づけて、大人はこれから外れぬように努力する。(註。以下の簡潔書は原文のまま)

一、日常の健康と慰めにとつて実際に必要なものだけを望むこと。

二、備愛することなく万人を平等とみなすこと。

三、自分の想念を觀察し、抑制して、それをいつも宇宙的は状態に保つてゐること。

四、万物が奉仕と合つてゐることにたいして感謝をすること。

◎ 金星の生活が地球のそれと異なる長は、彼らの親密さである。万人が友人であると考えられてゐるので、他人の家の水泳プールや芝花園などを奪はむのにはいちいち招待を受ける必要はない。誰がどこの家へ行つても歓迎され、自由に楽しむことができる。

◎ 金星の建物には内部に磁氣的な吸引装置が仕掛けてあつて、降りこる埃が下へ沈下しないうちに中央の容器にそれを引き寄せせしめよう。かくて空気の清浄法が地球よりもはるかに進歩してゐる。食物は急速に料理されてほとんど自然のままに食べられる。また衣服を水で洗濯したりしない。超音波利用による方法に似た処理法によつて衣服を清浄にするつより或るキャビネットのなかへ衣類を約三分回入れおけば全く新品同様になる。

◎ 彼ら金星人は自分の仕事を重く負担にしない。これは彼らの精神状態と想念の抑制力のためである。彼らは自分の仕事を「徹底的に楽しむために」やるのである。重労働のほとんどは機械にやらせて、研究と生

活のために多くの時間を生み出す。彼らの学校は美しい建物で、その中では生活の科学が教えられる。毎令に制限なしに誰もがどこでいつまででも學び続けるのである。

◎聖書の「エデンの園」について宇宙の兄弟から聞いたところによると、これは(註。以下は説文のまま)「人間の理性が狂って、我々が霊魂と名付けている、人間の永遠に生きる部分に関する知識を人間が忘れるときにおこる象徴的な物語りなのである。創造的な力と知性と一單位である宇宙的な人間すなわち、霊魂が肉体を建設し、それを生長させて、表現してゐるのである。ゆえに人間が自分のこの永遠なる部分を意識してゐる限り決して老いることはないし、如何なる緊張も過労をも感じないのである」

◎アダムとイヴの物語は人類の歴史を描いた寓話である。人間が自己の真実を知覚してゐるならばその運命は幸福であるが、個人的な感情に支配されるならば「エデンの園」から自我によって作りあげられる苦難の世界へと連れて行かれるのである。

◎金星には地球にあるような教会などは存在しない。彼らの生活そのものがいけば宗教ともいふべきものとなつてゐる。彼らの生活態度と宇宙の諸法則とをもつてすれば、宗教的な教えと日常生活との区別はない。

◎金星では毎令の如何にかかわらず遊星上を定期的に旅行したり、巨大な豪華船で宇宙の他の場所を訪れたりする。(註。旅行の重要性を強調してゐます。以下は説文のまま)「記録簿や小型の複製物などによって多くを學ぶことはできるけれども、旅行ことは尽まることのない實際的な教育の源泉であつて、それが楽しみだけでなく決して忘れることのできない永遠の価値をもつた教訓を与えることを宇宙人は知つてゐる」のである。

◎進化した遊星に病気が存在しないという理由は、感情が肉体に及ぼす影響がよく理解されて、抑制され、肉体に緊張を起さず、肉体はかりでなく心にまで休息を与えるからである。地球人はこの長全然がんである。我々はもっと余暇をもつようにして肉体に弛緩を許さなくてはならない。真実の弛緩の状態は楽土の如くに見出される。美しい理想は強力であつて、楽しさこそ人間を解放するのである。心を緊張させると感受性はたかまらぬ。また宇宙人が健康を保つ別な重要な要素は、肉体を柔軟に保つための一定の運動を行なうことである。肉体を心からいたわつて、決して緊張させないのである。

◎彼ら宇宙人は如何なる人間の集りのなかへ入つても祝福の心をもたないで座することはできないという意識的な知覚力をもつてゐる。他人を罪人と見ないで、生きた状態にある。神の英知と見る。

◎金星人は個人の生涯で教習年を生きて、いすれば死ぬけれども、死という現象を悲しむことはなく、むしろ生まれかわつてまた新たな体験の機会をもつことを喜ぶ。別離による苦痛はない。彼らに理解されてゐるような真実の愛は如何なる種類の別離をも知らないからである。

◎生長と進化は個人的な問題である。道は示されるが、各人が自分でそれを旅しなければならぬ。他人が自分にかかわることではできない。全く自分の態度一つである。

◎火星は科学と工業が高度に進歩してゐる。しかし金星と同様にそこにも矛盾はない。土星は太陽系内のバランスをとるための秤として役立っており、土星人は遊びと休息と仕事の間でのバランスをうまくとつてゐる。我々がこれら遊星人の如くに生まるならば、太陽系内の星族の仲間入りができるのである。

以上でオ一部オ九章までの概略を終ります。しかしこの種の書物は一字一句に重要な意義が含まれていきますので、大体概要だけで内容を把握することは無理です。このガリ版三ノズレタイプは原書の真実性の百分の一をもあらわしてはいませんから、そのつもりでお考え下さい。

X

X

さて最初に申しました通り、私は去る十一月十七日に京都でアダムスキの親友である、バンスン氏夫妻に会って、夕食を共にしながら約四時間を終始アダムスキ問題について語り合いましたので、二にその会話のなかで重要な部分を取り上げて掲げましょう。

バンスン氏は米国の或る大会社の社長で四十才の少壮実業家です。ノースカロライナ州立大学、英文学を學んだのち家業の会社を継いだとのことで、数カ国を歴訪したついでに日本に立寄られた次です。非常に豪放磊落で実に愉快な人物であり、夫人は氣立てのやさしい方で、二人ともきわめて親切な人だという印象が残りました。バンスン氏夫妻に会ったことは私にとって重なる意義をもつもので、私はこれによってU.F.O.の研究に一段と強い自信と勇氣を与えられたことを付記しておきましょう。

又 私はアダムスキを今世紀最大の人物であると考えている。あなたは、どう思っているか。

バ 私も同感である。私自身は凶器を見たこともないし、また目撃体験の如何をあまり問題にしていない。私が彼を尊敬するのは彼の洞察カと真実性である。彼は聖人ではない。人間だ。しかし偉大な導師であり、また実に賢明な人である。古く偉人というものは他人の思想を焼き直すのではなく、全く新しい概念をもたらすものだ。イエス

感などがあつてあつた。アダムスキもその通りで、彼の宇宙観等は偉大な知恵を獲得したものである。

又 米国人一般はアダムスキをどのように考えているか。

バ 米国人は一般に田舎に於いてあまり興味をもたないので、アダムスキをもよく知らない。

又 彼は教授と自称しているといわれるが、この実名は？

バ 彼は絶対にプロフェッサーと自称したことはない。ただ彼を敬慕する人たちがプロフェッサーの称号をつけて呼んでいるだけのこと、それが自称したかの如く誤り伝えられたのだろう。私自身も彼をプロフェッサー・アダムスキと呼んでいる。しかし彼は非常な賢者なので、プロフェッサーと呼ぶだけではとても物足りないほどだ。

又 ウィリアムソンをどう思うか。

バ 彼のことはよく知らない。しかし例の六人の目撃者についてはあまり気にしないほうがよい。問題は物的証拠や目撃証人などではなくて個人の直感力である。私自身の感覚で彼を偉大だと思つた。

又 キーホー少佐をどう思うか。

バ キーホーは必ずしもわるい人間ではないが、ただ二二のころが(と云つて頭を指しながら)制限されていて狭いのだ。

又 ルーシーはなぜ別れたか。

バ それは知らない。しかし彼女も立派な婦人だった。

又 向オくらいか。

バ 五十四、五オくらいだ。

又 日本の自採唯一コンタクトマン松村雄亮の体験をどう考えるか。

(二二でその体験やらアダムスキにたいする攻撃などについて詳細を記す。)

バ そんなものは忘れちまえ。

久 旅行の途中や他の国のG・A・P協力者に会ったか。

バ インドでマイトラ博士に会った。彼はセオオ哲学者だ。

久 あなたはアダムスキを経済的に援助しているか。

バ とまどぎしている。

久 クリシュナムルティを知っているか。

バ 知らない。帰ったら研究してみよう。

久 アダムスキの何を偉大だと感うか。

バ 彼の体貌の描写の写実性だ。しかも霊界通信とハッキリ区別している。そして甚だ偉大な勇氣をもっていることだ。

久 ケネディー大統領はアダムスキのことを知っているか。

バ それは知らない。しかし米国の政府高官、政治家、科学者などでアダムスキを支持する人がかなりいることは確かだが、米国の社会ではそのことを公然と表明することはできない。これは各国ともおそろしく同様だろう。

その他多くを語り合つて非常に楽しい夕べをすごした次第です。彼の英語は相当な早口であり、しかも発音が少々不明瞭なドラ音であるために、私はたびたび聞き返さねばなりません。彼は日本女性の優雅さを讃え、給仕の女性をしきりに「忍耐強い」とほめては感心し、また日本婦人の肌の滑らかさがとても気に入ったようでした。日本の風景特に京都の美晴しさを強調していました。右の会話からわかりますように、私の対アダムスキ親とバンスン氏のそれとはほとんど同じであつたわけですね。バンスン氏の十八才になるお嬢さんは名門校として名高いスミス・カレッジに在学中で、飛行機の操縦が得意だとのことですよ。

X

X

◎ 最近CBAの機関誌中にアダムスキがプロフェッサーを自称しているが攻撃し、その証拠と称して彼が撮影した田舎写真の下に「バンスン・アダムスキ」と記入してある姿を指差してはいますが、アダムスキの自筆署名を見られてはいる私には、これが全く他人の書いたものであることがわかりますので、ここに訂正しておきます。かつて世話になった悪人たちが次々と攻撃してはあくどい陰謀を弄して出すような連中が、プロフェッサーどころか宇宙のパイオニアと自称している。ほうがよほどコッケイです。聞くと二つにやりますと、一部の幹部が全く横暴をきわめていて、會員からまき上げた歴々の限りを尽くしてきたようですが、人間の弱さをたくみにつかまれて被害をこうむった方が逆輸入になってしまつたことは気の毒です。京都の某氏などはCBAのために家財をすっかり失ひ、現在は洋服の繕いなどをしてやっと糊口をしのいでおられるというのを聞いて何とも云えぬ気持ちになつてしまひました。一体何者にたぶらかされておられるのか知りませんが、未だに金集めに奔走しているというの狂いに狂つた集団こそ、まことにブラックの手先でなくて何でしょう。感情を抑制することを知らず、激情のおもむくままにかつての悪人たちを尊倒するこの暴れ馬のようは、妖氣に満ちた団体が地球人の代表として選ばれた選民であるとは、自然のバランスを完全に失つてしまつたこのようは存在は、いつかは同じ自然の手によって交還せしめられ修正される時が来るでしょう。

昭和三十三年十月二十七日

久保田 八郎